慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	字音形態素「時」の研究
Sub Title	
Author	陳, 亦昭
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2021
Jtitle	日本語と日本語教育 No.49 (2021. 3) ,p.151- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20210300-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』49：151（2021.3）

〔大学院文学研究科修士論文〕

字音形態素「時」の研究

陳　亦昭

本研究は、時間を表す接辞性字音形態素「時（ジ）」の意味用法およびその語基の性格を考察したものである。対象となるのは、たとえば「緊急時」「災害時」のような「時（ジ）」の用法である（以下、「時」とあるのは、すべて「とき」ではなく「ジ」を表す）。

考察にあたり、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) を用いて用例を収集した。そのうち、数字の後につく「時」の例や、具体的な時刻を表すものは本研究の対象とならないものと判断して排除した。

本研究は用例で見られた語基を一次結合と二次結合以上のものとに分け、まず一次結合語基に対し、語種、意味分野、品詞性、語彙的アスペクトの側面から分析した。その結果、語種に関して、異なり語数で全語基の約 8 割を占める漢語が最も「時」と結合しやすいということが明らかになった。意味の側面から見れば、「時」に先行する語基は、異なり語数、延べ語数ともに 9 割以上が「抽象的関係」「人間活動-精神および行為」の両意味分野に属していることがわかった。品詞性に関しては、野村雅昭（1974）「三字漢語の構造」で掲げられた分類に基づいて検討した。その結果、「時」の語基は主に A 類（体言類）、AC 類（体言とサ変動詞の語幹の性格を合わせてもつ類）によって構成される。そのうち、いわゆるサ変動詞語幹となる二字漢語の例が多いために AC 類がもっとも多い。語彙的アスペクトから見ると、状態動詞が見られず、瞬間動詞が最も多いという結果となった。

「時」に前接する二次結合以上の要素について、本研究は具体的な用例を示しながら考察を進めた。これらの用例に見られる語基の結合次数の多様さや臨時一語的な表現における生産性の高さから、「時」は二次結合以上の要素の内部にある要素同士間の結合度に影響されず、臨時一語的な表現を積極的に作る一方、このような表現は文脈に強く依存することが明らかになった。

上記の「時」に前接する語基の考察を踏まえ、本研究は「時」の意味用法について分析した。造語機能において、結合機能、意味添加機能というすべての字音形態素に見られる機能を除き、「時」に文法化機能があることがわかった。その他、本研究は同じ語基を有し、時間的な段階において出来事の前、中、後ともに指し示すことができる「～時」の表現に着目した。この「時」の性格を明らかにするため、本研究は時間を表す字音形態素「～中（チュウ）」の意味用法を参照した。その結果、「中」では動作のどの局面に出来事が起こったのかが注目されるのに対し、「時」の働きは、出来事が起こった時点を提示するということがわかった。つまり、「～時」は語基の時間的な段階にかかわらず、出来事の前、中、後すべてに用いることができるのである。

以上の考察により、字音形態素「時」の意味用法およびその語基の性格が明らかになった。